



# 社会心理学から見た 埋没便益研究

矢守克也

京都大学防災研究所

# 目次

- 「自然災害科学」最新号の拙稿（特集「非理系研究者から見た自然災害科学」に掲載）
- 「失敗科学」としての防災研究：  
顕在化する「失敗」と埋没する「成功」
- 現代の日本社会における防災研究
  - 肥大化する情報量と不安感
  - 「リスク社会」と自助・共助ブーム
  - 「安全・安心（不安）」という語法
- 埋没研究の2つの意義
  - 「成功」のアカウンタビリティの向上のための媒体
  - 適切な不安の復活と共有化のための媒体

# 「失敗科学」としての防災研究

- ヒューマンエラー（失敗）、「失敗学」、十分な成果なし・・・×
- 防災研究：大きな成功にもかかわらず、多くの場合、知識・技術の破綻（「失敗」）したときこそ、社会的プレゼンスを高め、現実的活動が加速する
  - 予測していなかった地域で地震が発生
  - 倒れるはずのなかった構造物が倒壊
  - 避難指示情報で逃げるはずの人間が逃げず
- 社会的表れが「成功」（成就）の形式をとることが多い他の研究領域とは対照的。「失敗」こそがこの領域を存立せしめている。
- 他方で、「成功」（成果）は、しばしば「埋没」。

# 本来これは自然科学全体の特徴

- 自然科学は、真理の集合ではなく仮説の集合であり、すでに普遍的な真理に到達したという充足性（「成功」）によって定義されているのではなく、まだ真理に到達していないという欠落性（「失敗」）の方が、自然科学の営みを支えている（大澤, 2007）。
- 「失敗」→自然科学の体系は疑惑にさらされるところか、反対に営みが強化される（さらなる研究活動が必要だと受けとられる）。

# しかし防災研究独自の特徴も

- 一般の人びとに対して：「失敗」が広範で明瞭な社会的事実として表面化する。
- 上のメカニズム（普遍的な真理へと至る道のりに生じた「失敗」を、真理探究の駆動力へと反転させるという魔術）が破綻する危険。「失敗」がそのまま素直に「失敗」として受けとられてしまう可能性。
- 研究者自身も：「成功」（未来の予測と制御：〈ポスト・フェストゥム〉性→〈時間〉論参照）と同時に、それ以上のことが起こること（「失敗」）に対する不安と期待が入り交じったアンビバレンス（〈アンテ・フェストゥム〉性）。某火山小説が学界でも評価された真の理由。

# 現代日本社会における防災研究①

- 現代の日本社会：
  - 一方で、自然災害への社会的関心が高まり、防災研究に相当程度の社会的リソースが投入。
  - 他方で、それにもかかわらず、「想定外」の自然現象が頻発し「未曾有」の事象がしばしば生じている（との報道、社会的認識）
- 専門家たる防災研究者といえども、実は、「真理」（正しい知識・技術）へと至る漸近線上に立っていないのではないかとの疑念
- 「失敗」は、単純素朴に「失敗」なのではないか。



## 現代日本社会における防災研究②

- 防災研究が、実際に「真理」へと至ろうとしているかどうかの確定は困難。しかし、その知識・技術が「失敗科学」のコンテクストに産み落とされ、それを前提とした社会的反応を受けていることはたしか。
- よって、防災計画を含む防災研究・実践も、こうしたダイナミズム抜きに考えることは不可。防災の知識・技術本体を生産するだけでなく、その生産と社会的適用をめぐるダイナミズム全体を俯瞰し、「社会の中の防災研究」を眼差す必要性。
- 「失敗科学」としての防災研究：いくつかの経験的事実で裏づけ可能。
  - 肥大化する情報量と不安感
  - 「リスク社会」と自助・共助ブーム
  - 安心・安全という語法

## (1) 肥大化する情報量と不安感①

- 多くの災害が発生。しかし、同時に、「なぜ頻発する災害の教訓が活かされないのか？」との疑問。
- 防災に関する研究活動・実践は、むしろ加速度的に増加。しかし、「これでほんとうに大丈夫か」との閉塞感や不安感。
- 「まだ足りない、もっと必要」との単純明快な診断。
- しかし、「真理」への漸近に対する信頼感が揺らぐ中、「過去の教訓を生かす」という一見自明な社会的活動の有効性に対する信憑が総体として弱体化。
- その焦燥感や不安感を払拭・補償するために、かえって反動として、防災研究・実践が、量的にインフレーションしている一面はないか？



## (1) 肥大化する情報量と不安感②

- 「真理」の「本質存在」（それが何であるか）は不確定でも、その「事実存在」（それが存在すること）が確定的でなければ、防災研究が総体として前進しているという確信を高めない。
- 逆に、イベントのたびに「まず地震だ、いや風水害が先だ」、あるいは、「都市防災だ、次は中山間地だ、いや原発だ...」と、断片化された情報が次々に去来しては霧散というイメージが定着。毎回、「未曾有の災害」、「生かされなかった教訓」、「想定外の不意打ち」。
- 諸課題が現実に山積しているためというよりも、〈アンテ・フェストゥム〉な社会の移り行きが、事態をそのように（次々に新たな問題が発生し、さらに未知のそれが続行するように）見せている点が重要⇒「埋没」を加速

## (2) リスク社会と自助・共助ブーム①

- 近年、防災における「自助」（自己決定・自己責任）が強調。「公助」の限界という動かしがたく見える事実を根拠に、単純明解にその重要性を指摘する立場と、「自助」が困難な人びとへの配視と対応を欠いた「自助」の強調に警鐘を鳴らす論陣。
- より基礎的な議論として、「自助」の概念が、Beck（1998）が指摘する「リスク社会」一般の特性と相関した、より原理的な困難を随伴。
- 「自助・共助」とは、「真理」（何が正しい防災対策か）を専門家すら確定不能なときに（「リスク社会」）、何をなすべきかをより広範な関係者の判断・選択（多くの場合、その一致点としてのコンセンサス）に委ねる傾向性が現実化したもの。

## (2) リスク社会と自助・共助ブーム②

- 「リスク社会」：客観的なリスクを多数抱える社会のことではない。自然災害、NBC災害と称される新車のハザードの登場＝「リスク社会」ではない。
- リスクを決定論的には表現できず確率論的にしか表現できない社会のことでもない。
- リスクの（蓋然性、確率）を指定しうる存在（典型的には、専門家）そのものが不確かなのではないかという不安によって特徴づけられる社会のこと。
- 言いかえれば、決定論的であれ確率論的であれ、何がリスクかを指定する「真理」へと漸近していないのではないかという不安によって彩られる社会のこと。

## (2) リスク社会と自助・共助ブーム③

- 医療におけるインフォームド・コンセント。情報開示、参加的リスクコミュニケーションなどのプラス面ある。
- しかし、専門家（医師）にすら判断不能な選択を、素人（患者）は、どのような意味でなしうるのか。それは、真の意味での「選択」ではなく一種の賭け。
- 真の選択（自己決定）は、単に多くの選択肢からの自由なチョイスではない。選択の正当性を認定するような〈規範〉を伴う必要性。「これでよい」、「これが妥当だ」という〈規範〉の感覚を伴っていないければ、単にサイコロを振っているのと同じことに。
- 〈規範〉は個人的なものではありえず、人びとによって妥当だと認定される必要がある社会的な存在。たとえば、科学的な「真理」や神の言葉。孤立無援の中でなす選択でも、「時が来れば、みなもわかる」と、潜在的には社会的な〈規範〉との合致を根拠としている。



## (2) リスク社会と自助・共助ブーム④

- 防災研究において、〈規範〉の位置を従来占めてきたのが、専門家が生産してきた「真理」。「自助・共助」の背景には、「真理」への信頼感の揺らぎの中で、専門家が〈規範〉の座から部分的に撤退し、それを一般の人びとに部分的に明け渡そうとする動機。
- しかし、「自助」（自己決定）は、「真理」という〈規範〉に裏打ちされる必要性。「自助」は、防災研究がもたらしてきた「真理」に支えられてはじめて機能するにもかかわらず、当の「真理」の不安定性こそが「自助」を要請するというジレンマ。
- 〈規範〉の座の明け渡し先として、社会を構成する一人一人の個人ではなく、地域コミュニティ、あるいは、専門家、自治体職員、地域住民など複数の関係者群から成るコミュニティを指定する動きが、「共助」のムーブメントの基盤。



### (3) 安全・安心という語法①

- 「安全」(safety)と「安心」(security)
- 「安心」: securityは、ラテン語のse- (～から離れて)とcura (care: 心配、気遣い、不安)の合成であり、「心配がないこと」。
- 大事な点は「なぜ心配がないのか」。一言で言えば、自分の代わりに心配の種(災害)について気遣ってくれる存在(「真理」を知る、あるいは少なくとも、それへと漸近しているとみなしうる専門家)を想定できるから。
- この意味で、埋没便益とは、多くの人びとが放棄し専門家コミュニティに委託することによって不可視化されたcare (心配、気遣い、不安)の集積。
- 反対側から見れば、埋没便益の可視化とは行き過ぎたsecurity志向に対するブレーキ操作。

# まとめ①

- 「安全・安心」が議論されているとき、次の2つの側面が混同。切り分けて考える要あり。
- 第1の側面：  
「真理」の事実存在を前提に、「真理」が存在するし、そこへ向けて歩むべきであるのに、それを適切になしていない研究者や業界に対して、人びとが怒り不信感をあらわにしているケース。「自分の代わりにcareしてくれるはずの人が、ちゃんと役割を果たしていないじゃないか。そのために私は不安だ（secureになれない）」というケース。
- この場合の埋没研究の機能：  
埋没便益の可視化によって、「成功」のアカウントビリティを向上させる働き（どちらかと言えば、より伝統的な活用法）

## まとめ②

- 第2の側面：  
第1の側面は、ある意味でまだ平和。なぜなら、人びとを「安心」(secure) させてくれるような「真理」、あるいは、それを担う専門家が、この世にいる(ある)こと自体は疑われていないから。ところが、「不安」には、もう一つより深刻な側面があり、専門家も含め、だれ一人として「真理」を知らないかもしれないという「不安」。→リスク社会の不安
- 埋没研究の機能：  
「成功」の可視化によって、逆に「成功」の限界を明示して、人びとが過度に手放したcare(心配、気遣い、不安)を取り戻し、専門家と一般の人びとがcareを共有(share)し、riskをco-takeすることをサポートする働き(どちらかと言えば、より革新的な活用法)。



ありがとうございました

---